



八千代市立大和田南小学校

校長 田中 一成

1 はじめに

「持続可能な社会づくりの担い手となる 子どもの育成」



八千代市立大和田南小学校

本校は、昭和47年の開校以来、社会科と生活科の研究に取り組んできた。令和元年度からは、これまでの研究教科である生活科、社会科に加え、総合的な学習の時間、交流及び共同学習、イメージン学習の研究に取り組んでいる。

取り組み始めた頃は、ESD やSDGs17の目標を、教師も子供た

ちも自分ごと化として捉えることが決して十分とは言えなかった。

令和元年は、5月にも関わらず気温が30度を越し、熱中症対策を余儀なくされ、「大南アラート」を作るきっかけとなった。また、9月9日千葉県に上陸した台風15号は、過去最強クラスの勢力で停電や断水など県内に大きな被害をもたらした。本校も、これまでは年1回程度の冠水被害を受けていたが、今では年に複数回、ゲリラ豪雨が起きるたびに冠水被害が起きている。水害の被害を軽減するため、校庭の地下には調整池も建設された。令和2年、新型コロナウイルス感染症が子供たちの学校生活を、そして、これまで親しんできた常識を根本から塗り替え、新しい生活様式に移行せざるを得ない事態を引き起こした。これらの出来事は、教師や子供たちの意識を変え、SDGs17の目標を自分ごと化するきっかけとなった。



- ① 今のままでは、環境、経済、社会の様々な面で「持続不可能」となってしまう。
- ② 地球規模の問題の存在を知り、それらの問題が自分たちの生活とつながっていることを理解したうえで、自分でできることをやってみる。
- ③ 取組だけで終わらず、価値観や能力・態度など子供たちの「変容」をもたらす。



何事もそうであるが、今まであるものを変えず、同じように行えば失敗することも少なく、比較的容易に取り組むことができる。しかし、それではたくさんの課題を抱える厳しい時代を自らの力で切り開いて生きていく「生きる力」は育たない。

本校は、2015年国連のサミットで「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標を達成するための次の社会の担い手である子供たちを育てていくために新しい生活様式に合わせた教育活動に取り組んでいるところである。

2 本年度の重点

- ①ESDカレンダーを活用し、総合的な学習の時間と各教科の連動を図る。

それぞれの教科がバラバラに授業をしていては、これからの時代に必要な能力が育たない。

本校では、生活科、総合的な学習の時間を柱として、研究教科の一つである社会科を含め、各教科が足並みをそろえて授業をするようにしている。その時に留意しているのは、単に各教科が足並みをそろえるのではなく、コンテンツ・ベース(内容：知識重視の教育)からコンピテンシー・ベース(能力：資質・能力を育成する教育)への転換を図ることである。すなわち「何を教えるか」から「何ができるようになるか」という転換である。「何を教えるか」の主語は「教師」であるが、「何ができるようになるか」の主語は「児童」である。要するに、教師から子供へと、主役を転換することである。

②ESDの視点をもって物事を見ることが出来る力をつけさせる。

小学校は、1年生から6年生まで発達段階の違う子供たちで構成されている。特に、下学年の児童にとって、「自分」と「世界」や「未来」をいきなりつなげることは難しい。まずは、「自分」と「身近な生活」や「今」の中に散らばっている、SDGsを発見することから始め、ESDの視点をもてる子供たちを育てる。

③カリキュラム・マネジメントを充実するための組織作り・学校づくり

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校は、新しい生活様式を取り入れるとともに、学習内容や活動内容を工夫していく必要がある。そのために校務分掌を見直し、各教職員を適切に配置して役割分担を明確にすると共に、相互の関係性を明らかにして協力体制を推進する組織となるように改善を図っていく。

3 本校での具体的な取組

(1)1年生の取組

①「なるほどザ・つうがくろ」

ふだん何気なく通っている通学路を見直してみると、新しい発見があり、楽しいものがたくさんあることに気づくことができた。

②「なつとなかよし」

シャボン玉遊びでは、うちわやハンガー等、道具によってシャボン玉の大きさや一度にできる数に違いがあることに気づくことができた。

④「特別の教科 道徳」

ルールを守ると気持ちよく生活できることや友達と仲よくすると学校が楽しくなることに気づくことができた。

④「花や葉っぱが大変身！」 ～ 自然の材料を生かした遊びを楽しむ ～



1年生は、5月からアサガオを育ててきた。また、畑や人が適度に管理した校庭の草地で季節の草花を観察してきた。毎年、1年生の生活科では、アサガオの花や草地に咲く花などを使って色水づくりを行ってきたが、今回はそれを少し発展させ、アサガオの花を使った草木染めに取り組んだ。

草木染めは、身近な自然の素材を染料として利用し、生活を豊かにしてきた先人の知恵として、現在に受け継がれている日本の伝統文化の一つでもある。身近な草花を用いた染色は、合成染料による染織品が身の回りにあふれている現代において、子供たちが「自然

の色や風合い」に目を向け、関心をもつ機会となった。

本格的な草木染めでは、媒染剤を使うが、1年生という発達段階を考え、そのまま染めた。低コストでもよりよい作品となるよう、さらしや和紙のはがきなどを使い、染め方も「色水染め」「たたき染め」「絞り染め」など複数行った。

⑤ 「ホカホカハートを集めよう」



1年生は、落ち葉や育てたサツマイモを使って模様をつけたオリジナルのはがきを作った。そのはがきを使い、お家の人には「ホカホカハート」を伝える手紙を書き、6年生には、感謝の気持ちを伝える手紙を書いた。6年生からもらったお手紙の返事を読んだ子供たちは、自分自身の成長に気づいたり、これからのめあてをもったりすることができた。また、ホカホカハートを集めるとお母さんが喜んでくれて、ほくもうれしくなったことや、学校でも、挨拶やゴミ拾いを頑張ろうという思いをもつことができた。

(2) 2年生の取組

① 「2021 おもちゃオリンピック開催！！」～金メダルは、そう！ きみにかがやく！～



2年生は、身近にあるものを使って遊びに使うおもちゃを工夫して作ったり、遊び自体を工夫したりして、みんなで遊びを楽しむ活動をした。

今回のおもちゃ作りでは、ゴムや空気(風)、磁石を使った「動くおもちゃ」に限定した。おもちゃを作るなかで子供たちは「もっと遠くまで」

「もっと高く」「もっと速く」動かすことができるように試行錯誤を重ね、科学的な見方、考え方を養うことができた。完成したおもちゃを使い「おもちゃオリンピック」を開催し、1年生を招待して一緒に遊んだりした。

(3) 3年生の取組

① 「ESD めがねをかけて見ると、見えてくるものがある」

ユネスコスクールとして持続可能な社会の担い手を育てていくためには、子供たち一人一人が、自然や社会に関わる様々な地球規模の課題を自らの課題として捉え、一人一人が自分にできることを考え、実践していく力を身につける必要がある。この力をつけるには、ESDの





視点をもって物事を見られるようになることが大前提となる。

本校では、ESDの視点を4つのレンズにたとえ「ESDめがね」と称している。しかし、3年生にとって様々な地球規模の課題を自らの課題として捉えることは難しい。そこで、1、2年生で学んだ

生活科を基盤に「自分」と「身近な生活」や「今」の中に散らばっているSDGsを発見することから始め、ESDの視点をもてる子供たちを育てている。

②「ミルクプロジェクト」

3年生は、毎日の給食に出てくる牛乳に焦点を当てた。本物に触れるために、ゲストティーチャーとして八千代市内で酪農を営んでいる加茂さんに来ていただいた。

加茂さんは、1回目の授業のときに「牛乳や牛のすばら

しさをもっと多くの人に伝えてほしい」というミッションを子供たちに投げかけてくれた。

子供たちは、加茂さんからのミッションを達成するために総合の学習として「ミルクプロジェクト」を計画し、酪農家さんの仕事や牛がSDGsに役立っていることなどについて調べながら、自ら学習の方向を見定めて、学びを深めていった。

2回目の授業では、ミルクプロジェクトの一環として、子供たちが普段あまり接することのない牛との触れ合いや体験をとおり、酪農に対する理解を深めるとともに、命の温もりを感じ、食への関心を高める活動を行った。

子供たちは、給食に出てくる牛乳の飲み残しを少しでも減らそうと、ポスターや校内放送を使い、牛乳の魅力や牛を育てている酪農家の魅力を広める活動を行った。

③市の移り変わり ～八千代市の様子と人々の暮らし～

3年生の子供たちは、八千代市の歴史を学習していく中で土地の利用や人口、生活の道具などの移り変わりを学習し、「これからの未来、八千代市がどんな市になってほしいか？」



について話し合いをした。子供たちからは、「みんなが安心して楽しく暮らせる市」「子供から大人まで楽しめる公共施設がある市」「いろいろなところに行けるみんなが便利に暮らせる市」という意見が出され、それを実現するために、自分たちにどんなことができるかを考えた。

(4) 4年生の取組

①「10歳の私たちができること」～“届けよう、服のチカラ”プロジェクトを通して～

少しでもごみを減らすために、(株)ユニクロさんとコラボをし、着なくなった子供服を回収し、難民に届ける活動を行った。活動を通して、服には「命を守る」「個性を表現する」チカラがあること、難民の半数が子供であることなどに気づくことができた。

また、エシカル消費(環境や社会貢献に配慮した消費)につながる商品について紹介し合い、人や環境にやさしい活動には、地産地消、詰め替え商品の選択、マイバックの持参などがあることなどにも気づくことができた。



(5) 5年生の取組

①「大南米を作ろう、救え、やちよ米」



本校では、毎年5年生が総合の学習で「大南米」作りを行ってきた。昨年度の5年生(現6年生)は、調べ学習や体験を通して学んだ知識や技術を次の5年生に引き継ぎたいと考え、成果物を残した。その一つがミニ水田である。

お米に限らず、作物を栽培するのに一番重要なことは「土づくり」である。

昨年度の5年生は、収穫が終わった後、土づくりのために稲わらをはさみで細かく切り、土にすき込んでおいてくれた。こうしておくとも稲わらは、「善玉」の微生物によって分解され、“天然の肥料”となる。

しかし、学校の水田は、コンクリートで作られた花壇を転用しているため、水はけがよくない。そのままにしておくと、水田に雨水がたまり、「悪玉」の微生物がメタンガスや硫化水素を生成する。そうなってしまえば、お米の収穫量が格段に下がる。そこで、昨年度の5年生は、水田の土をいったん外に出し、天日干しで、本来土がもっている力を最大限に引き出せるようにしておいてくれた。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で八千代市でも消費できない米がたくさんあることや昨年度の5年生の取組を知り、米作りに取り組んだ。また、学習の発展として、給食や家庭など残さいとなるご飯を少しでも減らすための活動やお米の消費量を増やすための活動を行った。



②「スゴいぞ！情報」～便利な世の中、増える危険～



子供たちは、回転ずしの情報通信機器の活用を例にして、いろいろな産業が情報を生かして発展していく様子について学習した。学習の終末では、「自分なら、回転寿司のロコサイトの情報を信じるか、信じないか」というテーマのもと、活発に話し合いを行った。話し合いを通して、情報活用の危

険性を理解したうえで、生活を豊かにするため情報を正しく扱える素地を養った。

(6) 6年生の取組

6年生の子供たちは、「SDGsで皆の未来を最高にしよう！」を共通のテーマにし、これまでの学習でSDGs17の目標達成のため、自分たちにできることについて話し合い、募金活動や韓国とのオンライン交流など具体的な行動に移してきた。また、今後、この活動を他校や地域の方々に広めていく場合、どんなことに気をつけていかなければいけないのかなどプレゼンをしてきた。学年内だけにとどまらず、近隣の小学校との意見を交換する中で、より広い視点で活動をしてきた。

①水の衛生問題の解決に向けた募金活動

②ペットボトルキャップをワクチンに換える活動



二酸化炭素排出削減のため、校舎内に回収箱を置いて11月までに1,500個集めることを目標にし、いらなくなった段ボールを再利用して、低学年にも喜んでもらえるよう、遊び心のある回収箱（ジェットコースター式）を作った。

集めたキャップは、民間企業と連携を図り、ワクチンとして利用してもらえるように取り組んだ。

③絶滅危惧種を減らす活動

④食品ロスの問題に目を向け、給食の残さいが減るようにする活動

⑤地球温暖化の防止を目指したりする活動

⑥ピオトープづくり

⑦いらなくなった本を回収し、「チャリボン」に送り、困っている子供たちのために使ってもらえるよう、直接的な募金とは異なる形で行う寄付活動

⑧SDGsについて1～4年生に教える活動

6年生は、4年生に2年前に取り組んだ「届けよう、服のチカラ」プロジェクトのときの気持ちや服の大切さについてプレゼンテーションソフトを活用しながら“ミニ授業”をした。

ミニ授業は、一方的に6年生がお話をするだけでなく、4年生の子供たち一人一人に考えさせる場面やグループでの話し合いの場面を設けたり、自



6年生によるミニ授業

分たちで撮影した動画を見せたりした。グループごとの話し合いで使った円卓(丸形段ボール)も6年生が普段の学習で使っているものである。6年生は、これまで学習を受ける側として学んだ経験を生かして、今回のミニ授業の内容を考えた。

⑨パラスポーツ大会を開く活動

⑩SDGs すごろくを作る活動

⑪手作り品を販売して、売り上げを寄付する活動



プレゼンをしに来た子供たち

6年生の児童が、企画書とサンプル品をもって校長室を訪ねてきた。その企画書には、「働く大変さを知り、寄付することで恵まれない貧困層の子供たちの苦しみを減らす」と目的が書かれていた。その他にも、保護者の皆さまに協力を依頼する手紙やサンプル商品の見どころ、寄付先なども記載されていた。その企画書からは、「校長先生を納得させ、許可を得て、自分たちの考えたことを具体的な行動に移したい」という子供たちの熱い思いが伝わってきた。

今回の6年生の募金活動がこれまでの募金活動と大きく違うのは、単に募金をお願いするのではなく、商品を生産し、制作にかかった材料費を引いた利益を寄付に当てるところである。

今回の6年生の募金活動がこれまでの募金活動と大きく違うのは、単に募金をお願いするのではなく、商品を生産し、制作にかかった材料費を引いた利益を寄付に当てるところである。

SDGs はもともと、「経済」・「社会」・「文化」という3つの領域において、将来に向け「持続可能な開発」も進めていながら未来の世界を生きる人々が幸せな暮らしを送っていきけるようにするためのものである。今回提案をした子供たちの企画は、より実社会でのSDGsに近いものとなった。

⑫「アートマイル国際協働学習プロジェクト」に参加し、台湾の小学生と一緒に壁画を描く活動

⑬韓国との国際交流活動

ポストコロナ時代のSDGsの達成に向けた日韓交流オンライン授業を行った。このオンライン授業は、次のように3段階で構成された。

1. SDGsの地域社会での達成をテーマとして、ブレンド型学習の授業を共同開発する。



オンラインによるブレンド型学習

2. 日韓の教職員が取組結果について、相手国の児童に対し授業を実施する。

3. オンライン交流を通して学びを共有する。

オンラインによるブレンド型学習の共同開発の主な目的は、互いの学校の教育システム

やユネスコスクールとしての活動をより深く理解していくことにある。

第1回目の交流授業では、アイスブレーキングを行い、第2回目は、日韓双方の子供たちが考えた「子ども人権宣言」を発表した。

【子ども人権宣言】※人権侵害の事例を話し合った後、グループごとに考えた宣言である。

- コロナになった人も仲間はずれにしない!
- コロナかどうか決めつけない。いじめを見つけたら注意する。
- 他国の人や県外の人への差別をしない。
- 自分の言葉に責任をもつ。コロナにかかったとしても仲よくすることが大事。
- 他の人が差別をしても相手が嫌がらないように自分たちはしない。言葉は選んで言う。自分と違うからと言って差別はしてはいけない。
- 仲間外れにせず、いじめられている人がいたら助ける。外国人を差別しない。人が嫌がることをしない。



(7) えがお学級(特別支援学級)の取組

①交流学習 電気を作って動かそう ～えがお遊園地～



えがお学級は、SDGs 7番目の目標「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」とSDGs 12番目の目標「つくる責任 つかう責任」について、身近なところから興味をもち、考えていくために「えがお遊園地」を作った。手回し発電や足こぎ発電、ソーラーパネルなどを使って実際に

電気を作り、クリスマスツリーの電球を光らせたり、模型の電車を動かしたりしながら「えがお遊園地」で楽しく活動をした。また、活動を通して電気を作る大変さを知り、「みんなにエネルギーを大切に使ってほしい」という思いをもち、廊下に展示し、全校に取組を紹介した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、通常学級との直接交流はできなかったが、その分、えがお学級の中で制作活動を楽しむ形の交流学習ができた。

(8) イマージョン学習での取組

Lanthanum festival(夢灯祭り)

イマージョン学習は、外国語をただ単に学ぶことを目的にするのではなく、その言語を使って様々な教科を学習するための手段として用いているのが大きな特徴である。

今回の学習(図工)で作ったランタンは、岩手県の「夢灯り」を参考にした。



子供たちは、互いの作品を鑑賞し合い、友達の作品のよいところを英文で書いた。幻想的な雰囲気の中、子供たちは、“英語のシャワー”を浴びながら、夢灯祭りを楽しんだ。

(9)ユネスコスクール 3rd Anniversary ～各学年の取組報告会～



令和4年2月に行われたユネスコスクール3rd Anniversaryは、子供たちが、この1年間の取組の成果を発表する場であると同時に、他の学年の取組を見ることにより、自分たちの活動を振り返る場でもある。また、学年が一つ上がるとどんな学習をするのか見通しをもつことができ、次年度への期待につながる場でもある。

昨年度に引き続き、本年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ユネスコスクール3rd Anniversaryは、ICT機器を活用し、映像で互いの取組を見合うようにした。放送を使った開会式では、6年生 ユネスコ委員会 委員長が次のような話をした。

「この1年間、大和田南小学校では、学年ごとにSDGsについて取り組んできました。私は、実際に、水衛生問題に苦しむ人々への募金活動や地域子どもサミット会議に参加して、他校との関わりを深め、それぞれ行ってきた活動を発表しました。活動を通してとてもよい経験となりました。

私は、今年で卒業しますが、中学でも他校との関わりを大切にして自分たちができるところを行っていきたいと思います。1～5年生の皆さんも、来年も自分たちが、今できることを考え、取り組んで行ってください。」

4 おわりに

日本では、全国どの地域で教育を受けても、学習指導要領に沿った一定水準の教育を受けられる。本校がユネスコスクールだからと言って特別なことをしているわけではない。本校では、長年生活科・社会科を研究教科として継続してきた経緯を踏まえ、「単元のねらいが持続可能な社会の担い手を創ることとどう関連しているのか」という視点からアプローチしてきた。

アプローチをするときのキーワードとなるのが「ESD めがね」である。ESD めがねをかけ、4つの視点で物事を見ることができるようになれば、子供たち一人一人が、自然や社会に関わる様々な地球規模の課題を自らの課題として捉え、一人一人が自分にできることを考え、実践していくようになる。

そのために私たち教師が留意しなければならないのは、「教科を教える」から「教科で学ぶ」への意識の転換である。「コンピテンシーで教科等を横断する」ことを実現するためには、各教科が子供たちにどのような能力を育てるのか、「教科の本質」をしっかりと認識することだと考え、今まで以上に日々教材研究を積み重ねていかなければならないと考える。